

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770276

研究課題名(和文) 韓半島系土器の受容実態からみた古墳時代対外交流の時期的地域的展開

研究課題名(英文) The transformation and expansion of intercultural interaction in the Kofun period as seen through the acceptance of Korean-style pottery

研究代表者

中久保 辰夫 (NAKAKUBO, TATSUO)

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：30609483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、2000年代以降、豊富な発掘調査事例と研究の増加によって、再構築が必要となった古墳時代対外交流について、韓半島系土器の受容過程を実証し、その時期的・地域的展開から背後にある日韓交流の質的变化を探ることである。研究成果として、古墳時代対外交流を「物資入手型」と「技術(文化)導入型」にモデル化し、2つの対外交流戦略が前者から後者に移行する過程を考古資料に基づいて論じ、日韓交流の変化と渡来文化の戦略的受容が日本古代国家形成に大きな役割を果たしたと結論付けた。そして、こうした古墳時代対外交流の理解を、論文、国内外の口頭発表などを通じて発信した。

研究成果の概要(英文)：A wealth of new archaeological data and research since the year 2000 has made it necessary to reconsider the nature of intercultural interaction during the Kofun period. The goal of this research is to consider the qualitative change of Japanese-Korean relations through an analysis of the development and expansion of Korean-style pottery accepted within the Japanese archipelago. As a result, the author developed the "goods importation strategy" and "technology adoption strategy" models of Kofun-period intercultural interaction, clarified that Japanese-Korean relations transitioned from the former type to the latter based on archaeological evidence, and concluded that changes in Japanese-Korean relations and the strategic acceptance of immigrant culture played a significant role in the formation of the ancient Japanese state. Furthermore, the author disseminated this understanding on an international scale through articles and presentations at conferences both inside and outside Japan.

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代 日韓交流 渡来人 初期窯業生産 倭系遺物 韓式系土器 古墳時代土器 異文化受容

### 1. 研究開始当初の背景

日本列島の歴史・文化に東アジア世界との交流が果たした役割が大きいことは、よく知られている。とりわけ、日本古代の国家形成期にあたる古墳時代において対外交流のもつ歴史的意義は、国家形成論に考古学が積極的に提言するようになって以降(都出比呂志1991「日本古代の国家形成論序説 前方後円墳体制論の提唱」『日本史研究』343号)ますます重視されるに至っている。

考古学の有する資料的な強みは、文献等の史料に必ずしも記録されない日常的な文化交流、交易の実態、地域の動向を詳細に把握できるという点にある。韓半島に由来し、日本列島各地から出土した韓半島系土器は、韓半島系渡来人の動向、交流ルートを示す直接的な資料として着目されてきた。

しかし、主に2000年代以降、日韓両地域における発掘調査の進展により、以下のような点で従来の古墳時代対外交流論に再検討が必要となってきた。

第一点目は、従来の研究では土器資料を基に、渡来人の居住地や系譜を重視する傾向にあり、韓半島系土器の时期的な変遷に関しては十分な検討がなされていなかった。

研究代表者は、研究開始段階まで3世紀半ばから5世紀にいたる韓半島系土器の分布状況を検討してきたが、分析を通じて韓半島系土器は、3・4世紀では貯蔵器種が主体となり、5世紀前半では煮炊用土器、5世紀後半では調理施設付属具が増加するという見通しを得た。こうした韓半島系土器が持つ役割の変遷を詳細に解明できれば、貯蔵運搬を目的とした交易重視から移住・定着を中心とする人的交流へと、日韓交流における内実の変化をより明瞭に議論できるのではないかと着想するに至った。

第二の研究史上の問題点は、韓半島系土器と在来土器の関係性について、考古学研究者の関心が3・4世紀と5世紀では重なっており、不明な点が多かったことである。

研究代表者は5世紀の近畿地域を対象に、煮炊用土器を中心とした折衷土器の分析を通じて、韓半島系土器の受容過程に関する研究を進めていた。この分析手法を用いれば、渡来人と在来集団との関係性について通時的な議論を深めることができ、上述した交流内容の変化について踏み込んだ議論ができると着想した。

第三点目は、5世紀を中心とした渡来文化受容の地域的展開に関する評価である。2000年代以降、韓国における発掘調査および考古学研究が大きく進展したことにより、日韓交流の主体と地域性の背景があらためて議論されるようになった。

そこで、初期須恵器の甕(はそう)という岩手県中半入遺跡から鹿児島県南摺ヶ浜遺跡まで広範囲に分布し、在来の土器に模倣される土器を対象資料として、渡来文化受容の広域共通性を探ろうとした。

以上、新資料の増加と呼応して浮上した考古学研究上の3つの課題を解決することにより、古墳時代日韓交流の时期的・地域的展開を把握することができると着想した。

### 2. 研究の目的

本研究は、出土土器資料の考古学的分析に基づく韓半島系土器の変遷およびその受容過程を実証し、その时期的・地域的展開から背後にある日韓交流の質的变化を探ることを目的とした。この研究目的を達成するために、研究開始当初における課題に対応すべく以下で3つの小目的を設定した。

#### (1) 韓半島系土器の変遷に関する検討

韓国における土器編年研究の進展をふまえ、日本列島出土韓半島系土器、韓半島出土倭系土器を、四半世紀単位で変遷をまとめる。韓半島系土器および倭系土器の推移を基礎として、古墳時代における日韓交流の質的变化を再検討する。

#### (2) 韓半島系土器の受容過程解明

これまでなされてきた韓半島系土器の製作技術痕跡の観察に加え、煮炊用土器の使用痕跡観察に基づく土器使用方法および内容の復元といった新たな分析手法を用いて、韓半島と日本列島では調理方法・内容の差異があることを指摘し、外来の調理方法が取捨選択を経て、定着していく過程を明らかにする。

この上で重視する視点は、韓半島系土器の受容に認められる集落差である。集落差として顕在化する受容実態は、その背景として韓半島系渡来人と在来集団との関係性があらわれていると推定できるが、これを出土資料実態に即して解明する。

#### (3) 渡来文化受容の地域展開

須恵器甕を中心に儀礼に用いられた土器を検討対象として、外来系土器の受容実態と地域展開を検討する。とりわけ、須恵器が出現する前後に体部に穿孔する小型丸底土器が日本列島各地で出現することに着目する。

### 3. 研究の方法

本研究において(1)最新の調査・研究事例に基づく韓半島系土器の変遷図作成、(2)韓半島系土器の分布図作成、土器製作技術痕跡及び使用痕跡観察による韓半島系土器受容過程の検討、(3)須恵器甕を中心とした須恵器の実物観察による系譜、土器広域分布背景の検討、以上3つの研究方法に基づき、相互に関連付けた調査を実施し、得られた所見をもとに研究をまとめた。

主な調査実施対象遺跡は、次の通り。

2013年度：大阪府野中古墳、長原古墳群、森遺跡群、桜井谷2-2号窯、奈良県布留遺跡、和歌山県鳴神遺跡群、滋賀県植遺跡、静岡県恒武遺跡群、郷ヶ平6号墳、二本ヶ谷積石塚群、二子塚1号墳、有玉古窯跡群、香川県権八原A5号墳、村黒遺跡、尾崎西遺跡、韓国大成洞古墳群、福泉洞古墳群、杜谷古墳群、府院洞遺跡

2014 年度：大阪府野中古墳、奈良県布留遺跡、四条大田中遺跡、新沢千塚古墳群、行燈山古墳、和歌山県鳴神遺跡群、楠見遺跡、三重県神前山 1 号墳、長崎県原の辻遺跡、カラカミ遺跡、双六古墳、韓国鳳徳遺跡、萬樹里古墳群、紫籠里遺跡、チャラボン古墳、山亭洞遺跡、河南洞遺跡、東林洞遺跡、城山里遺跡、香燈遺跡、上芳洞 A 遺跡、風納土城  
2015 年度：大阪府野中古墳、津堂遺跡、向墓山古墳、誉田御廟山古墳、大仙陵古墳、奈良県稻荷西 2 号墳、風呂坊古墳群、布留遺跡、和歌山県鳴神遺跡群、田井遺跡、京都府久津川車塚古墳、兵庫県那波野丸山窯、野々池 7 号墳、愛知県船山古墳、山形県西沼田遺跡、韓国丁村古墳、伏岩里古墳群、野幕古墳

#### 4. 研究成果

研究期間を通じた成果としては、(1) 新出土器資料の分析を通じ、3 世紀から 5 世紀にかけて、日韓交流の歴史的展開について再検討を試みたこと、(2) 近畿地域を中心に韓半島系土器出土遺跡分布図を作成し、集落差が顕著となる渡来文化受容実態を実証したこと、(3) 須恵器甕といった儀礼用土器の広域展開に着目し、儀礼の共有と更新、中心-周辺関係といった観点から古墳時代土器の特徴を考察したことがあげられる。具体的には次の通り。

##### (1) 古墳時代日韓交流の展開

日韓交渉論は、これまで古墳・墳墓副葬品を中心になされる傾向にあったが、土器にみえる交易や人々の移動、生活の場である集落遺跡の動態をふまえて提示した点は、本研究の特徴である。

2000 年代以降、著しく資料が増加した韓半島南西部から出土した倭系土器の資料調査を 2014 年 3 月、10 月、2015 年 9 月に実施できたことは、本研究の大きな成果となった。2014 年 11 月、2016 年 3 月には、韓半島出土倭系土器の年代と日韓相互交渉の実態について国際シンポジウムで発表した。その結果、これまであまり着目されていなかった 5 世紀後半における日本列島と栄山江流域の相互交流実態、集落や手工業生産にみる同調の関係が浮き彫りとなってきた。

この成果として、次のような日韓交流の変化が描けるようになった。

3 世紀半ばから 4 世紀にかけて日本列島中央部と東アジア世界との交渉・交流を舶載品の流通から読み取ることができ、4 世紀中葉から後葉に古墳被葬者間では日韓交渉が活性化していくようにみえる。しかしこの時期には、日本列島内の集落遺跡では韓半島系土器が減少し、集落そのものも衰退する現象が認められた。この背景には 4 世紀における中国大陸の混迷、勃興する韓半島諸地域の政治勢力、その余波としての交易ネットワークの再編といった激動する東アジア情勢が背景にあると考えることができる。

こうした事態の打開策の 1 つとして、5 世

紀の中央政権は、渡来系集団を媒介者として知識・技術を積極的に導入し、領域内を整備する戦略を採った。韓式系軟質土器出土遺跡と手工業生産遺跡の増加は、こうした東アジア情勢の変化に対応する社会的要請を基礎とするものと考えられる。さらに集落や土器からみた日韓交流では、交流地域が韓半島南東部から次第に南西部へ展開するあり方も看取できた。5 世紀後半には、韓半島南西部において倭系土器が増加し、日韓両地域において相互交流が確実視できることも本研究を通じて、明確となった。

##### (2) 韓半島系土器の受容実態

「渡来人の足跡」を示す考古資料として評価されてきた韓半島に由来する土器資料の最新の分布図を作成するとともに、韓半島系土器の受容が、5 世紀代を中心に発展する集落を核に受容されるあり方が判明した。

また、煮炊用土器のみならず、貯蔵用土器にみられる韓半島系土器の受容実態についても、研究期間内に須恵器を中心として検討することができた。とりわけ、須恵器・二重口縁壺という日本列島在来の意匠を有する土器資料を対象に、初期須恵器生産の日本列島の変質を解明した。こうした研究成果は、これまで十分な接合作業がなされていなかった 3・4 世紀と 5 世紀の土器研究を通時的に検討したことによるところが大きい。

以上の結果、外来文化の受容が、故地そのままの技術や意匠を取り入れるのみならず、変容と改良を加えて在来文化と融合する過程として理解できることが推定できた。

##### (3) 渡来文化受容の地域的展開

須恵器の甕といった韓半島南西部の栄山江流域と共有される儀礼用土器の広域展開に着目し、東北南部から南九州まで拠点的な集落を中心に分布すること、日本列島在来土器である土師器にも甕の模倣土器が広域に認められることを明らかにした。

さらに、5 世紀代に生産が確立する須恵器に関しても最新の研究動向をまとめるとともに、初期須恵器窯、初期須恵器出土古墳、集落の再検討からその斉一的なあり方と独自性もつ意味を 2014 年の和歌山県立紀伊風土記の丘秋期特別展のシンポジウムにおいて論じた。

以上、3 つの研究当初段階の課題に対応する成果に加え、発展的な研究成果としては、古墳時代対外交流を「物資入手型」と「技術(文化)導入型」にモデル化し、2 つの対外交流戦略を東アジア情勢の変化にあわせて古墳時代中央政権が柔軟に用いたことが、古代国家形成に大きな役割を果たしたという理解を 2014 年 4 月のアメリカ考古学会で口頭発表したことがあげられる。

古墳時代対外交流論を土器研究や集落動態、古墳築造動向をもとに総合的に再検討したこと、英語圏での発表がきわめて少ない古代日韓交流について、今後の比較研究を意識してモデル化し、国際発信を試みたこと、渡

来人について最新出土資料と新たな分析視角をもって再検討し、日本古代国家形成における歴史的役割を考察した点は本研究の意義であったと考える。

研究成果については、論文、図書、国内外における学会等の口頭発表を通じて公表したことに加え、料理教室と講義を組み合わせた特色ある市民講座アカデミックッキング(2014年3月)、小学生を対象とした講座(2014年7・8月)をはじめとして特色あるアウトリーチ活動にも力を注ぎ、対象者を意識した内容構成をもって成果を公表した。

また、2016年秋に以上の研究成果をとりまとめた専門図書を刊行する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計 4 件)

中久保辰夫、須恵器・二重口縁壺の製作背景、査読有、韓式系土器研究、(2015)、pp.237-254

中久保辰夫、古墳時代原初的官僚層形成に関するノート、査読無、待兼山論叢、第48号、(2014)、pp.25-50

中久保辰夫、渡来系集団の定着過程と河内地域の集落展開、古代学研究、査読有、第199号、(2013)、pp.17-24

中野咲・中久保辰夫、韓半島系土器のあり方からみた集落分類、古代学研究、査読有、第199号、(2013)、pp.3-8

##### [学会発表](計 6 件)

中久保辰夫、土器・集落からみた5・6世紀の栄江山流域と倭の相互交渉、歴博国際シンポジウム「古代日韓相互交渉の実態」2016年3月4日(招待講演)、千葉・国立歴史民俗博物館

中久保辰夫、野中古墳の発掘調査と出土品の意義、野中古墳出土品重要文化財指定記念国際シンポジウム「百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流」2015年11月14日(招待講演)、大阪・大阪大学会館

中久保辰夫、野中古墳と河内政権、2015年度大阪・京都文化講座(前期)、2015年6月15日(招待講演)、大阪・立命館大阪梅田キャンパス

中久保辰夫、倭系遺物の年代論、大韓文化財研究所2014下半年国際学術大会、2014年11月29日(招待講演)、国立羅州博物館、韓国

中久保辰夫、初期須恵器出土古墳の史的意義、平成26年度秋季特別展記念シンポジウム、2014年11月2日(招待講演)、和歌山・和歌山県立紀伊風土記の丘

NAKAKUBO Tatsuo, Change in Patterns of Cultural Interaction in the Early State Formation in Japan, SYMPOSIUM STATE FORMATION IN

EARLY JAPAN, The 79th Annual Meeting of the Society for American Archaeology, April 26, 2014, Texas, USA

##### [図書](計 1 件)

高橋照彦・中久保辰夫 他、大阪大学大学院文学研究科、野中古墳と「倭の五王」の時代』2014、96頁

##### [産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

##### [その他]

###### アウトリーチ活動

中久保辰夫、土曜の考古学 日本古代史の争点 謎の4、5世紀を探る、2013年5月11日(招待講演)、大阪・よみうり天満橋文化センター

中久保辰夫、おいしいごはんの考古学、大阪大学×大阪ガス「アカデミックッキング」、2014年3月26日(招待講演)、大阪・大阪ガスッキングスクール千里

中久保辰夫、野中古墳の発掘から半世紀豊富な埋納遺物の調査と研究、百舌鳥・古市古墳群をより深く知るための世界遺産講座、2014年6月11日(招待講演)、大阪・LICはびきの

中久保辰夫、めざせ！考古学者夏休み考古学教室、夏の小学生科学体験教室2014、2014年8月19日(招待講演)、大阪・大阪大学総合学術博物館

中久保辰夫、「激動の5世紀と橿原の遺跡 渡来文化の導入」、平成26年度夏期特別展『新沢千塚』講演会、2014年8月23日、奈良・クリーンセンターかしはら

中久保辰夫、かたちかわる、じだいがわかる、大阪大学21世紀懐徳堂 i-spot 講座【今昔ものづくり】シリーズ、2014年7月25日(招待講演)、大阪・大阪市まちづくり情報発信施設「アイ・スポット」

中久保辰夫、古市古墳群造営勢力と渡来人、NPO 法人フィールドミュージアムトーク史遊

会例会、2014年10月25日(招待講演) 大阪・羽曳野市民会館

中久保辰夫、5・6世紀の播磨と於奚・袁奚伝承、豊中歴史同好会、2015年9月12日(招待講演) 大阪・豊中市蛸池公民館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

中久保 辰夫 (NAKAKUBO TATSUO)  
大阪大学・大学院文学研究科・助教  
研究者番号：30609483

### (2) 研究分担者

なし ( )  
研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし ( )  
研究者番号：